

吉井源太と明治

《20》

三極の良さを引き出す

楮や雁皮は、正倉院に保管されている文書の用紙に使われていたことがわかっている。

麻もこの時に使われていた原料だったが、これは次第に使われなくなる。処理の難しさや、衣服に用途を優先させるようになったことが原因かと考えられている。

三極はこれらに比べると大変新しい原料だ。最近では、奈良時代のお経用紙に使われていたこともわかってきたが、広く使われたのは江戸時代から。特にその後期に駿河半紙として盛んに作られた。ただし、その紙は赤味を帯び、質は弱いものだった。

「日本製紙論」でも、三極は、近年に皮の精製法が改良されて良質の紙ができ

るようになり、需要が増えたと書かれている。石灰のみで煮ると、繊維が黄色から次第に赤色を帯びてくる。明治時代に苛性ソーダが使われるようになって、それがなくなつた。この繊維は密で細かく、紙になると光沢があり、雁皮に似た紙になる。当時新しく開発された紙のほとんどに三極が使われた。薄い紙では図写用紙、厚い紙では洋紙の代用品となる紙が漉かれた。

源太が三極栽培を本格的に始めたのは、明治十七（一八八四）年だった。優良な種子だと認められていた静岡県産の種を購入して、吾川郡伊野町字沖に三百坪の土地を借りて蒔いた。

見物人が多数あったとい

う。これでできた苗をと

り、同郡三瀬村字西沢、東沢の山、七町歩余りの所に植えた。この時も見物人が多数あり、「老農は杖を引き、鎌を腰にさして見に来

た」と日記に書かれている。一大イベントのようだっただろう。

大いに良い結果となったので、県庁農商課山林局や各郡村役場に報告した。ま

た、大分、愛媛、宮崎県などに栽培方法を伝習した。これにとどまらず、源太は同二十（一八八七）年に鳥取県へ巡回指導に行ったとき、鳥取県にあった三極の種を採って栽培してみた。この結果、鳥取県に自生している三極は質が大変良く、静岡県産にも優るほどだといふことがわかった。そしてこれを高知県下の同業者に知らせた。

同三十六（一九〇三）年の履歴書では、今はこの種類を栽培する人が多くなっている」と書いている。

明治三十年代になると三極の需要はいっそう増え、源太もしきりにこの栽培を勧めた。三極を栽培する事の利益を十項目並べた「三極十徳」という標語のようなものも作った。これによ

ると、三極を栽培して原料を作ることの利点は次のようなものがある。

苗の仕立てが簡単で手数がからない、他の作物を作ることができない場所を育つ、楮は寿命が十年ほどだが三極は三十年くらいある、暴風雨にあっても倒れたり損害を受けたりしない、獣に食われる害を受けない、他の原料に比べて収穫量は三倍ある、蒸す時に楮よりも薪代がかからない、皮剥ぎやゴミ・チリを取る手数が少なくてすむ、三極を使って漉いた紙の販路が拡大して需要が多い、海外へ輸出する紙の原料が確保できる——ということだ。

（京大大学院研修員、京都府在住）



三極を植えた畑。手前左が楮（いの町小川柳野）

（京大大学院研修員、京都府在住）